

阿刀田高
ブレイク11夜



！ブレイク11夜

田高



文藝春秋

© Takashi Atohda 1982

Printed in Japan



Takashi Atohda

コーヒー・ブレイク11夜

昭和五十七年四月二十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 阿刀田 高

発行者 杉村 友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 (〇三) 二六五・一二一一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁・乱丁の場合は
お取替致します

コーヒー・ブレイク11夜・目次

あなたに捧げるブルース

5

冥^{くら}い道

27

グッド・タイミング

51

おしゃべりな脳味噌

75

壁からの声

121

お望み通りの死体

143

骨の樹

163

だれかが夢を覗いている

187

不完全な男

209

電話で自殺を

241

影絵

285

装幀 長尾みのる

あなたに捧げるブルース

あなたは三十一歳。どこにでもいるような平凡なサラリーマン。北池袋の民営アパートで気ままな独身生活を送っている。月給は先月の手取りで二十三万八千四百三十二円。月ごとに多少の異同はあるけれど、おおむねこんなところだ。あ、そうか。今月は昇給があるはずだぞ。

目下のところ恋人はいない。親しいガール・フレンドもなし。あまりもてるタイプではない。自分でもうすすくと自覚している。

タバコ少々。酒まあまあ。週に一度は軽い二日酔い。部屋の掃除も行き届かず、三度の食事も行き当たりばったり。人生にさほど大きな夢があるわけではない。どことなく中途半端な毎日だ。適当な女がいるならば、まあ、結婚くらいやってみてもいいな、と考えている矢先だった。

ことの起こりは背広のポケットの底にあいた小さな穴。あなたはまだローンを払い終っていない新しい背広のポケットに、もうすでにしてそんな綻びほころの生じている現実を知らなかった。人生

はどこにどんな運命の岐路があるかわからない。

既製服はたいいてい細工が粗雑にできているから、糸が一、二本ほつれることもけっしてめずらしくない。昨日までは穴も小さかったのだろうが、この朝になってなにかの圧迫を受け、綻びがほんの少しだけ大きくなっていったのだった。

この朝と言うのは、四月の第一土曜日。空は花曇り。温気はトンロリとなま暖かく、漢詩で言えば「春眠不覺曉」の季節。俳句で言えばめかり時。人間は蛙に眼玉を借りられてしまい、そのため目をあけられず、眠くて眠くてたまらないのだ、と言う。眼醒し時計が無情に響いて「ああ、こんな日に仕事なんか厭だな。本当なら休みのはずなのに」と、独り住まいの天井を睨んで呟いてみたものの、約束のあることだから仕方がなかった。

十一時過ぎにあたふたと布団から飛び出し、昨日残業までして完成した書類を携え、下北沢の駅前の喫茶店まで赴いた。下北沢はここ十年ばかりのあいだに急速に賑わった町である。奇怪と言ってもよいほどに細い道が網を張っている。小便くさい路地の先に瀟洒なビルが建っている。あなたはこのあたりの地理には無案内だったが、指定の喫茶店はすぐにわかった。

コーヒーはアメリカン。砂糖は少なめに。ご多分に漏れずあなたも肥り過ぎを気にしている。うまくもないコーヒーをすすりながらスポーツ紙に目を通した。

約束の十二時半を十分過ぎたのに、相手は現われない。あなたはウエイトレスの後姿に視線を送る。スカートの下にはどんな肌が隠れているのだろう。とたんに昨夜のことを思い出した。

池袋の駅前、真夜中の一時近く。タクシー乗り場が見える電話ボックスのかけに女が独り歩いたり止まったり、落ち着かない様子で立っていた。

——連れを待っているのかな——

と、思って眺めていたが、そうではないらしい。

——夜の姫君かな——

と、思ったが、これも見当はずれのようなのだ。

酔っぱらいが無駄けな視線で女を賞めながら通り過ぎて行く。

「どうしたの？」

あなたは内気な質だが、このときばかりはわれながらなぜか気軽に声がすんなりと喉を通り抜けた。

「電車がもうなくなっちゃって」

「俺もこれから飯を食うんだけど、一緒にどう？」

「ええ……」

スナックに誘い、スバゲッティ・ナポリタンを食べ終えたときにはさらに夜は更けていた。

——どういう女だろう？ 水商売の女じゃなさそうだし。しかし、まあ、アパートへ連れて帰るのは、あとあとうるさいことが起こると面倒だし——

盛り場の裏通りを歩きながら、町のホテルの門構えの方向へ肩で押すようにすると、女もトントンとそちらのほうへ足を踏み込み、そのままそこで休むこととなった。まあ、思いがけないご馳走、と言ったところ。

女の名は山形紀子。二十八歳。東上線の成増あたりに住んでいるらしい。

あなたは朝の六時に眼を醒まし、

「俺は帰るぞ」

と告げたが、女は、

「もう少し眠らせてえー」

と、いぎたなく布団をかぶっている。

「じゃあな」

と、宿賃だけ支払って帰って来た。

それからまたアパートで一眠りして眼醒し時計に呼び起こされ、書類を携えて下北沢まで駆けつけた、という塩梅。情事の印象はいつも翌日になると奇妙にぼやけたものになってしまう。

——どんな女だったかなあ。顔立ちはわりと好みのタイプだったけど——

その顔立ちもはっきりとは思いつけない。町でもう一度会ったらわかるかどうか……。体の特徴はさらにぼんやりとしたものになってしまっている。

——朝、もう一回抱けばよかった——

家まで書類を取りに帰らなければいけなかったのだから仕方がない。あなたは律儀で、気弱なサラリーマンなのだ。

約束の時間を三十分も過ぎたのに相手はいつこうに現われない。あなたは苛立つて貧乏ゆすり始めた。

——今日はプロ野球の開幕だというのに——

巨人ファンのあなたは、午後二時からテレビの前にへばりついて開幕ゲームを観戦する予定をきっかりと立てていた。

プロ野球に関心のない人には到底こうしたときのファン心理は理解できまい。たとえ一分でもプレイボールの時間に遅れようものなら、なにかよくないことが——最悪チームの敗北につながるような事態が生じてしまうと、そんな焦躁感に襲われてしまうものなのだ。

あなたは昨夜の散財で懐ふところ具合は豊かでないけれど、それでも、

——うん、今日はプロ野球が始まるぞ——

そう考えれば、あなたの週末は薔薇色に輝き出すのだった。

「それにしても、どうしたのかな」

あなたはアメリカン・コーヒーをすでに飲み干し、コップの水もほとんど無意識のうちに二は
いも飲んでいた。

——よし、仕方ない。タクシーで帰ろう——

仕事の話を手短かにすまし、そのあと車を飛ばしてアパートへ戻れば三十分足らずで帰れるだ
ろう。タクシー代は惜しいが、ゲームを初めから見られる喜びに比べれば、折合いがつく。しか
も車に乗れば先発投手がだれか、ライン・アップはどうか、ゲーム前の楽しみもカー・ラジオで
多分聞くことができるだろう。

あなたは腕時計を見ながら、客と別れたあとの細かい手順まできっかりと頭の中で組み立て
た。駅前でタクシーを拾おう、このときその車がカー・ラジオをつけているかどうか確かめるの
を忘れてはいけない、アパートの少し手前で車を降り、角のフランス・ペーカリーで好物のサン
ドウィッチを買おう、部屋へ帰ってインスタント・コーヒーを作り、テレビの前にすわる、おそ
らくその頃にプレイボール……。

「やあ、どうも」

声が響いて待ち人が現われたのは一時十分過ぎだった。話は簡単にすんだ。

「やけにそわそわしてんじゃないですか」

「いや、べつに」

「じゃあ、今日はこれで」

「はい、どうも」

待っているあいだに水を飲み過ぎたせいだろう、あなたは尿意を催し、立ちあがったついでにトイレットのほうへ足を踏み出した。

そのとたんにポケットの穴から——ポケットの底にあいた小さな穴から百円玉がひとつ転げ落ちた。

「ほう、そっちだ」

百円玉は椅子の下にのがれたらしい。

「お金を無駄にしちゃいけないよ」

「ええ」

あなたは膝をつき、百円玉はすぐに見つかったが、そのわずかな時間のうちに他の客がトイレットへ入ってしまった。緑色のセーターをまとった若い女。

「あ、私が払います」

「いや、いや、お待たせして申し訳なかった」

相手がコーヒー代を支払っているあいだ、あなたはずっとトイレットの方向を注視していたが緑色のセーターは現われない。ご婦人の手洗いは長いものと相場が決まっている。あなたはそのまま喫茶店を出た。

「じゃあ、これで」

「では、よろしく」

客とは店の前で別れたが、下腹の尿意はおさまらない。タクシーに乗ったら途中で困るだろ

う。

突如方針が変更となり、あなたは駅の構内へ向かった。洗面所は改札口の中にしかない。

中途半端な気持でキップを買い、駅のトイレットで用をすましてきたとき、上り電車がザサツと入って来た。あなたは咄嗟に階段を駆け上り、駆け下りる。

——タクシー代を節約しよう——

電車で帰ってもぎりぎりプレイボールに間に合うかもしれない。

新宿駅で小田急線のキップのまま国鉄線へ乗り換えてしまったのは、やはり野球のことを考えて放心気味だったからだだろう。

山手線は思いのほかすいていた。あなたは座席に腰かけ、またぞろスポーツ紙のプロ野球開幕特集の記事に目を送っていたが、そのとき車両の両端から三人ずつ、合計六人の車掌が入って来て検札を始めた。

——あ、いけない。小田急のキップのままだぞ——

そう気がついて、まあ、事情を説明すればなんとかなるだろう”と思いながら、なにげなく内ポケットをさぐったが、

——いかん、財布を忘れてきたぞ——

朝、アパートを出て以来、ポケットの中の小銭ばかり使っていたので、気づかなかったのだ。喫茶店で勘定を払う羽目になっていたら、とんだ恥をかくところだった。タクシーだって……いや、タクシーならアパートの前までつけてもらって部屋へ財布を取りにいけばいい。

だが、今はそんなことはどうでもかまわない。さし当たってどうしよう。ポケットの中にはもう小銭はない。車掌たちは、六人がかりで検札をする以上かならず不正乗車の客を一人や二人摘

発してやらねばなるまいと、なにやらまなじりを吊り上げいかめしい表情で近づいて来る。

あなたは高校生の頃キセル乗車を発見され、駅員室でこっそり絞られたことを思い出す。二時間近くも厭味を言われ、最後には泣き出してしまった。

——さて、困ったぞ——

キップもなければ金もない。そのくせこの区間には通用しない定期券だけは身に帯びているとなると、疑われても仕方がない。

——定期券は持っていないような顔をするとして……いずれにせよ、多少は恥ずかしい思いをしなければいけない——

あなたは、もともと口下手で、なにか釈明をしなくてはいけないときになると吃どもつてしまう癖がある。それを思うと、心臓がドキンと厭な脈を打つ。検札係は無情に近づいて来る。

ズボンのポケットにお札の一枚くらい入っていないかなと腰を動かしたとき、なにかが尻に触れた。

——なんだろう——

視線を落とすと、なんと、ズボンと座席のあいだに赤い小さな財布が挟まっている。さっき高田馬場で隣の客が席を立ったとき、忘れていったのではあるまいか。

あなたは左右を見まわし、それから目を正面に向けたまま指先で尻の下の方の財布を捕らえた。尻の下で探してみると、たしかにお札の感触が指に触れる。

——助かった——

さながら手品師が掌にカードを隠すようにして財布を取りあげ、近づいて来た車掌に、「あの、すみません。新宿で小田急のキップでそのまま乗っちゃって……」

と言いかけたのだが、全部を言い終らぬうちに、隣りの婦人が、突然大きな声をあげ、
「^す拘摸です。あの、拘摸です」

と、うろたえながらポケットの中やバッグの中を探りだした。

検札係たちがサッと色めき立つ。

「どこに？」

「たしかここに入れておいた財布が……ついさっき見たんだから間違いないの」

籠のような手さげを指差して確乎たる自信の面持ちで訴えた。

検札係はいったんは緊張したものの、その婦人はべつに拘摸の現場を取りおさえたわけではない。いくぶん拍子抜けしたように、

「間違いないんですね。じゃあ、次の駅で被害届けを出してください」

と、事務的な口調で答えた。

ところが、あなたの向いの席にすわった中年の女が——眼鏡をかけた、権高の感じの女だが、こいつがもう一人の車掌を把え、しきりになにかを言っている。なにやら指をあなたのほうに向けて差している。

次の瞬間、その車掌がつついとあなたのそばに近より、あなたの手首を握って開かせた。

赤い財布が現われた。

「これ、あなたのですか」

あなたは口ごもり、あわててドギマギと、

「ええ……そ、そうです」

とても三十一歳の男が持つ品物には見えない。